



夜な夜な短歌集 2015 年秋号 第6巻

題：読書



1 + 1 + 1 は、3 プラス α 。

連作で読書の世界をお楽しみ下さい。

めくる

「おしまい」は終わりではない幼子の生みだしてゆく永遠がある

母の声を思い出しつつ読む絵本きつねとねずみの声色に迷う

もう何度めくっただろうバラバラになったページをつなぐ午後二時

雪

短歌脳がうまく働かず、詠めずに悩むこともたびたびありますが、
それでも短歌が好きです。



秋の日、その一頁

木犀の黄金きんの香りに撫でられて頁から我取り戻したる

君の繰る頁の音と温もりに包まれて見る草原の夢

頁より紅色の秋溢れ落つ母がひとりの娘だった日

本が好き。頁をめくるのが好き。
文字の他にもたくさんのが、その隙間には詰まっています。



h
a
n
a
k

付箋

返された本のみどりの付箋から恋が始まる午後の図書室

この本の舞台を見たいという君にコメント寄せる「僕も見たい」と

声もなく二人それぞれ本を手にページ繰る音とききに重なる

Sage (太田青磁)

毎年夏に発表される「新潮文庫の100冊」を読むよつこっています。
よつやへ、あと一冊となりました。



想いの在処

本棚の隅であなたを待ち伏せる背でせな気付いてその手に抱いて

読友の熱きレビューに誘われ扉を開ける新たな世界ジャンル

再読を重ねた本のやわらかさ指先が知る想いの在処

kaze (みちくさ)

心地よいリズムに易しい言葉をのせて、いつか誰かの心に届く歌が詠めますように



図書館の目

「すみません。その名の書籍はございません」だって その名は テレビ番組

幾人の子らを笑顔にしたのだろうツギハギだらけのアンパンマン

書物より厚い時を重ね合う静かな夫婦の連れ添う姿

せんむ

今回、再度参加させて頂きました。
しばらく離れると難しさを痛感します。



愉らく

言の葉のたわいのなさに笑みくずれ背中をかるくはじいてみたり

引き裂いて腑分けをしては縫い合わすばらばら混じる君とわたしと

アラームが呼んでいるけど帰れない朝にとけてく君を追いかけ

ふみ。

読書ってテーマ 予想外に難しくくてw 活字中毒の一夜を詠んでみました。

きみが
好きで
ござる。

花の名前

重たげな表紙を前に風たちと遊びはじめる君のくせつ毛

一冊を分け合う声が響きおり二乗されてく鼓動がいたい

追っていく文字が静かにささやいたこの胸に咲く花の名前を

誰かを完全に理解することは出来ないけど、同じ本があれば少し、近付ける気がします。
歌も本も大事な鍵。



serii

物語

伏せられた睫毛に光り遊ばせてただひたすらに本を読むひと

かの人を読みおりし書に出会いたり人指し指は背表紙撫でて

あなたにも私に一つ物語ふれあい揺らぎ映す世界は

てる

「読書」…難しかったあ…ってかオッサンが詠む歌ではないな(笑)



『罪と罰』と僕

『罪と罰』読んでないのに読んだふり君の前では見栄をはる僕

ドストエフスキー君も好きと言ったら吹きだした君に頬が紅潮

古ぼけた『罪と罰』からクローバーあの日をふと思ひ出す

新地学

歌集を読んでいると、詩の集まりなのに物語性を感じることがあります。
この3首もそれを目指してみました。



一喜一憂

オッパイが大きいと書いてあるからこのヒロインはきっと死なない

読む方の身にもなれよツンデレめ！電車の中でにやけてるオレ

ええ！嘘だ！イチオシの君が死ぬなんて！次のページは一週間後

nonたん

一番身近なことなのに一番悩んでしまった。



メッセージ

あなたから借りた詩集のいいところにチケット挟んで次の約束

リビングに緋色金梅文庫本 置き去りにして夫を試す

父の書齋 わたしの嗜好の元凶は隠れて読んだ勝目梓

本を介して伝わる思いを「メッセージ」としました。
私の思いも伝わると嬉しいです。



レイ

逃避行

はやくきてふと立ち寄った本棚の前ではもどるわたしの心音

ページ繰る、左の親指抱きにゆく右の小指がぎゅっとなつかんで

くるしくて忘れさせてと入ってく別の世界でくわすデジャビュ

つるる

今回のテーマ・読書は考えるのも楽しかった。
結句で着地しないようにと思っても、それがなかなか難しい。



ブローグ

長細い指がめくった序章には敬語にまざるタメロの距離

本革のブックカバーを外してる二冊は笑んで背を見せあう

猫好きに貸した岩合光昭はキスされそうなアメスピの匂い

華（彩華）

手フエチです。犬派です。



シェアしよう

読みながら欠片を落としてきてしまい本を閉じてもまだ戻れない
シェアしよう あなたのトーマスわたしのミッフィお互いの子供だった頃
願わくば一冊一冊を細胞に配架してゆくような読書を

読書はインプット、短歌はアウトプット。
自分という器からこぼれる言葉が短歌になればいいのですが…。



れいぼ

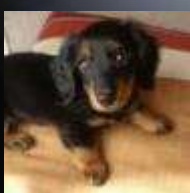
本の街

その街はページをめくる音で満ち雨音の街と呼ばれています

半地下の小部屋に表紙というドアがしんと並んで宇宙の広さ

古書店の本たちはみな待つことをやめてはばたく衛星軌道を

背表紙の数だけ世界があって誰もすべてを踏破できない、
そんな妄想の歌です。



ティ



編集後記

最近、読書メーター内で短歌のつぶやきをあまり見かけないかもしれません。夜な夜な短歌コミュをきっかけに短歌を始めた人も、その少し前から始めていた人も、活躍の場を大きく拓けています。新聞歌壇の常連だったり、短歌の結社に入って励んだり、専門誌に応募して掲載されたり、ネットの歌会で活躍したり。9,000首も応募があるコンテストで入賞する人もおられます。もちろんマイペースで楽しんでいる人も多くいます。このお題ならば…と多忙な中、快く歌を寄せてくれた歌人たちに感謝します。みなさんやはり、「読書」が好きな方ばかりです。

今回は初の試みとして、連作で依頼しました。短歌のこんな側面もお楽しみいただけたらうれしく思います。

最後に、相談に乗ってくれた華さん、レイさん、場所を提供してくれるmasaさんに感謝します。

企画・写真・編集 momonga（もも）

背景素材 somephoto さま

夜な夜な短歌コミュについて

『夜な夜な短歌コミュ』とは、読書メーターにあるコミュニティです。短歌が好き、短歌を詠みたいというメンバーが集まって交流をしています。みなさんも良かったら一緒に短歌を作ってみませんか？

* [夜な夜な短歌人による 夜な夜な短歌コミュ](#)をみる